

「シモンとアンデレの家」

マルコの福音書 1:29～31

【新改訳 2017】

マルコの福音書

1:29 一行は会堂を出るとすぐに、シモンとアンデレの家に入った。ヤコブとヨハネも一緒であった。

1:30 シモンの姑が熱を出して横になっていたの、人々はさっそく、彼女のことをイエスに知らせた。

はじめに

今日の箇所はイエシュアがシモンの姑（シモンの妻の母）の熱を下げて癒された出来事が記されています。横にならなければならない高熱ではあったとは思いますが、伝染病や死に至るような病であったとは記されていません。ですから出来事としてはたしかに癒しの奇蹟だと言えますが、盲人の目を開け、死人をも生き返らせるほどの御方の奇蹟としては、いささか小さな出来事に思えてしまいます。しかも先ほど会堂で、汚れた霊、悪霊を追い出すような驚くべき御業を行われた直後ですから、果たしてこれをわざわざ書き記す必要があったのかとさえ思えてしまいます。ですからこの出来事もまた、単なる癒しの奇蹟というだけではなく、別のメッセージを持った、神が何かを指し示して記させたたとえ、「型」ではないかと考えられます。そうであるとすれば、「（イエシュアとその）一行は…シモンとアンデレの家に入った。ヤコブとヨハネも一緒であった。」という記述は、以前、マルコ 1:16～20 に記された「シモンとシモンの兄弟アンデレ」と「ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ」という二つの兄弟に指し示された存在について述べたように

「シモンとシモンの兄弟アンデレ」 ➡ イスラエルの民、ユダヤ人

「ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ」 ➡ 異邦人の教会、クリスチャン

このように考えるならば、イエシュア一行が入った「シモンとアンデレの家」とはメシアであるイエシュアを王として迎えるイスラエル王国を指し示し、そしてそれにつながる存在である異邦人の教会が「ヤコブとヨハネも一緒であった」という記述に指し示されていると考えられます。つまりこの 1:29 の記述は単なる状況描写ではなく、イエシュアを王とするイスラエル王国を中心に世界の国々が治められる「メシア王国、千年王国」とも呼ばれる「神の国、御国」が建てられる神の御計画の成就を指し示しているたとえ「型」だと考えられます。ですから今日取り上げるシモンの姑が癒されるという出来事、奇蹟もまた同様に神の御計画を指し示すものとして考えてみたいと思います。

1. 熱を出して

1:30 でシモンの姑は「熱を出して横になっていた」と記されています。この「熱病」のことをヘブル語でカツダハト(קצדחת)と言い、その最初の言及がレビ記 26:16 にあります。

【新改訳 2017】

レビ記

26:13 わたしはあなたがたの神、【主】である。わたしはあなたがたを奴隷の身分から救い出すために、エジプトの地から導き出した。わたしは、あなたがたのくびきの横木を砕き、あなたがたが自立して歩めるようにした。

26:14 しかし、もし、あなたがたがわたしに聞き従わず、これらすべての命令を行わないなら、

26:15 また、わたしの掟を拒み、あなたがた自身がわたしの定めを嫌って退け、わたしのすべての命令を行わず、わたしの契約を破るなら、

26:16 わたしもあなたがたに次のことを行う。わたしはあなたがたの上に恐怖を臨ませ、肺病と熱病で目を衰えさせ、心をすり減らさせる。あなたがたは種を蒔いても無駄である。あなたがたの敵がそれを食べる。

これは預言者モーセを通してイスラエルの民に語られた、偶像礼拝に関する事項の一部です。「もし、あなたがたがわたしに聞き従わず、これらすべての命令を行わないなら」すなわち彼らが偶像礼拝を行うなら、という内容の中に「熱病で（目を衰えさせ）」と訳されている部分に聖書で最初のカッダハトがあります。またこのカッダハトの語源となっているのはカーダハ(קָדָח)「(火を)ともす、燃えつく」という意味の動詞です。

【新改訳 2017】

申命記 32:22 火はわたしの怒りで燃え上がり、よみの底まで燃えていく。地とその産物を焼き尽くし、山々の基まで焼き払う。

これはモーセがその死の間際に、やがて神である主を裏切って偶像礼拝に走るイスラエルの民を予見して唱えた歌の一節です。ここで「(火は) …燃え上がり」と訳されているのが聖書で最初に使われたカーダハです。偶像礼拝に走るイスラエルの民に対する神の激しい怒りが、焼き尽くす火に象徴され表現されています。このように「熱病」カッダハトそしてその語源であるカーダハもともに、神を捨て偶像礼拝に陥ったイスラエルの民を指し示しているのではないかと考えられます。

偶像礼拝とは…

偶像礼拝とは、石や木で像を作り、それを拝むことですが、神の御心を求めず、聞き従わず、自分にとって都合の良い、自分の要求を満たしてくれる存在を求め、それに依存する考え方、生き方全般を指します。ですから人またはその能力、金、権力、快樂なども偶像となり得ます。

2. シモンの姑

また「熱を出して横になっていた」のは「シモンの姑」ですが、この「姑（しゅうとめ）」という言葉はヘブル語でホーテネト(חֹתָנִית)と言い、旧約聖書では一度しか使われていない言葉ですが、その内容はイスラエルの民に与えられた、のろいに関する掟の一つです。

【新改訳 2017】

申命記 27:23 「自分の妻の母と寝る者はのろわれる。」民はみな、アーメンと言いなさい。

またこのホーテネトの語源はハータン(חתן)「結婚する」という意味の動詞で、本来はヤコブの家の者すなわちイスラエルの民がヒビ人すなわち異邦人の家と婚姻関係になることを指し示しています。

【新改訳 2017】

創世記

34:7 ヤコブの息子たちは野から帰って来て、このことを聞いた。息子たちは心を痛み、激しく怒った。シェケムがヤコブの娘と寝て、イスラエルの中で恥辱となることを行ったからである。このようなことは、してはならないことである。

34:8 ハモルは彼らに語りかけた。「私の息子シェケムは、心からあなたがたの娘さんを恋い慕っています。どうか娘さんを息子の嫁にしてください。

34:9 私たちは互いに姻戚関係を結びましょう。あなたがたの娘さんを私たちに下さり、私たちの娘をあなたがたが迎えてください。

これはヤコブの娘ディナとヒビ人のシェケムの結婚が勧められている場面です。異邦人との結婚、それは「イスラエルの恥辱」、「してはならないこと」です。なぜならそれは異邦人の神々すなわち偶像を信じる人を受け入れる、一つの家族となる行為であり、結果的にそれは異邦人の神々を受け入れること、偶像礼拝の罪を犯すことになるからです。

このように、「熱病」カッタハトも「姑」ホーテネトもともにイスラエルの民が犯す偶像礼拝の罪と、そしてそのゆえに受ける報い、のろいを指し示していると考えられます。ですからこの「シモンの姑が熱を出して横になっていた」という記述は旧約聖書の歴史の中に記された、神を捨て去り、偶像礼拝の罪を犯し、神の怒りによって滅ぼされたイスラエルの民、北イスラエルと南ユダの両王国を指し示していると考えられます。また「シモン」という名前の語源である「聞く」という意味の動詞シャーマ(שמעו)、この本来の意味についても前回述べたように、神の御前から隠れる、神から離れるという行為を指し示しており、これもまたイスラエルの民の墮落した歴史と重なります。

しかし神はイスラエルを永遠に見捨てられたものではありません。イスラエルが墮落したのも滅ぼされたのも神の御計画です。そして再び建て直されることもそうです。それが次の節に示されていると考えられます。

【新改訳 2017】

マルコの福音書

1:31 イエスはそばに近寄り、手を取って起こされた。すると熱がひいた。彼女は人々をもてなした。

3. そばに近寄り

イエシュアはシモンの姑の「そばに近寄り、」と記されています。ここにヘブル語で「近寄り、ささげる、持って来る」という意味の動詞ナーガシュ(נגש)が使われています。この言葉の最初の言及から本来の意味を考えてみたいと思います。

【新改訳 2017】

創世記

18:20 【主】は言われた。「ソドムとゴモラの叫びは非常に大きく、彼らの罪はきわめて重い。

18:21 わたしは下って行って、わたしに届いた叫びどおり、彼らが滅ぼし尽くされるべきかどうかを、見て確かめたい。」

18:22 その人たちは、そこからソドムの方へ進んで行った。アブラハムは、まだ【主】の前に立っていた。

18:23 アブラハムは近づいて言った。「あなたは本当に、正しい者を悪い者とともに滅ぼし尽くされるのですか。」

18:25 正しい者を悪い者とともに殺し、そのため正しい者と悪い者が同じようになる、というようなことを、あなたがなさることは絶対にありません。そんなことは絶対にあり得ないことです。全地をさばくお方は、公正を行うべきではありませんか。」

これはその罪の大きさのゆえに天の火と硫黄によって滅ぼされた、ソドムとゴモラの町についての記述ですが、ここでアブラハムが神である主に「近づいて（言った）」と訳されている箇所には聖書で最初のナーガシュがあります。彼が神に近づいた理由は、「正しい者を悪い者とともに滅ぼし尽くされるのですか。」という、神に公正なさばきを行うことを問いかけ、また求めるためでした。ですからナーガシュには本来、神が正しくさばかれること、すなわち正しい者と悪い者をはっきりと分けることを求めるという意味合いがあると考えられます。正しい者すなわち神がお選びになった者、御心にかなった者は救われ、そしてそうでない者は悪い者として滅ぼされる、これは神の御計画の本質と言えます。アブラハムはここで決して自分の願いを言っているわけではありません。神は「公正」をもって「全地をさばくお方」であられるので、そのようになさってくださいという、神の御心のままに、その御計画のとおりになりますようにと言っているのですが、ここには神とアブラハムが話し合っ物事を決めていく様子が見えませんが、これは「神の国」において、神はアブラハムの子孫であるイスラエルの民と近い関わりを持ちつつ、ともに国々をさばく、統治することが指し示されていると考えられます。ですから 1:31 「イエスは（シモンの姑の）そばに近寄り」と記された記述には、イエシュアがイスラエルの民と「近寄り」すなわち近くあられ、彼らとともに国々を治められることが指し示され、それが「神の国」であるということが示されていると考えられます。

4. 手を取って

そしてイエシュアはシモンの姑の「手を取って」起こされました。ここにはアーハズ(אָהַז)「捕らえる」という意味の動詞が使われています。

【新改訳 2017】

創世記 22:13 アブラハムが目を上げて見ると、見よ、一匹の雄羊が角を藪に引っかけていた。アブラハムは行って、その雄羊を取り、それを自分の息子の代わりに、全焼のささげ物として献げた。

これは神がアブラハムに与えられた試練の一場面です。神は彼に彼の一人息子であるイサクをいけにえとしてささげるようにと命じられます。アブラハムはこれに従い、モリヤの山でイサクをささげようとしていますが、彼がイサクに刃物を振り上げたところでこれを止めさせられます。そしてその「代わりに」ささげるいけにえとして彼に一匹の雄羊を見つけさせます。その雄羊が「(角を藪に) 引っかけていた」と訳されているのが聖書で最初のアーハズです。これを単純に解釈するならばアーハズとは本来、「代わりに」、身代わりとなってささげられる、すなわち殺されるために捕らえられるという意味であると考え、これを人の罪の身代わりとなって死なれたイエシュアの十字架と結びつけることができますが、ここで「(自分の息子) の代わりに」と訳されているヘブル語のタハット(תחת)という前置詞は本来、「~の下に、~のもとに」と訳されており(創世記 1:7)、そのためこの箇所は「アブラハムは行って、その雄羊を取り…息子『の下に』…献げた」とも訳することができます。するとここに一つの絵が浮かび上がってきます。それはすなわち御父である神が、御子であるイエシュアを王とし、「その下に」イスラエルの民を備える、という「神の国」の御計画の「型」を見出すことができるのです。神がイエシュアを王とする「神の国」の国民として、イスラエルの民をアーハズ「捕らえる」、すなわちお選びになったことが指し示されているとも考えることができます。ですから 1:31「イエスは…手を取って」という行為の中には、イエシュアの十字架による身代わりの死と、神がイエシュアを王とする「神の国」の国民としてイスラエルの民を選んでおられることの二つ出来事、御計画が指し示されていると考えられます。

5. 起こされた

そしてイエシュアはシモンの姑を「起こされた。」と記されています。ここにはクーム(קום)「起きる、立つ」という意味の動詞が使われています。

【新改訳 2017】

創世記 4:8 カインは弟アベルを誘い出した。二人が野にいたとき、カインは弟アベルに襲いかかって殺した。

これは人類史上最初の殺人として有名な、アダムの息子カインとアベルの兄弟の間に起こった出来事です。兄のカインは弟のアベルに「襲いかかって(殺した)」と訳されているのが聖書で最初に使われたクームです。このようにクームとは本来、アベルを殺すために「立ち」上がる、行動を「起こす」という意味であると考えられます。殺された弟アベルは神に目を留められた、受け入れられた存在でしたが、兄のカインはその逆でした(創世記 4:4~5)。ここに偶像礼拝によって墮落し、神から離れてしまったイスラエルの民と、彼らによって殺される神の御子イエシュアの十字架の死が表されていると考えられます。このようにイエシュアがシモンの姑を「起こされた」という行為の中には、御自分がイスラエルの民、ユダヤ人たちによって十字架にかけられ、殺されることを指し示していると考えられます。ちなみにこの十字架に「かけられる、上げられる」ことにもクームが使われています。

6. 熱がひいた

「イエスは（シモンの姑の）そばに近寄り、（彼女の）手を取って起こされ」ました。すると「熱がひいた。」と記されています。この「熱」は先ほど述べたカッダハトで、同様にイスラエルが神を捨て、偶像礼拝によって墮落した罪が指し示されていると考えるならば、イエシュアが十字架によって殺される、死なれることでその罪が「ひいた」、つまり無罪となって赦されることが指し示されていると考えられます。ここで「（熱が）ひいた」と訳されているヘブル語はラーファー(הָרַף)「沈む、弱る」という意味の動詞で、この最初の言及が出エジプト記 4:26 にあります。

【新改訳 2017】

出エジプト記

4:24 さて、途中、一夜を明かす場所でのことだった。【主】はモーセに会い、彼を殺そうとされた。

4:25 そのとき、ツイポラは火打石を取って、自分の息子の包皮を切り取り、モーセの両足に付けて言った。「まことに、あなたは私には血の花婿です。」

4:26 すると、主はモーセを放された。彼女はそのとき、割礼のゆえに「血の花婿」と言ったのである。

これはモーセが神の召命を受け、エジプトへと遣わされるその途上での出来事ですが、そこで神はなんと御自分がその働きのために選び出されたモーセを、彼がその召命に応じ、聞き従ったにもかかわらず「殺そうとされた」とあります。これは何とも理解し難い出来事です。しかしモーセの息子の「包皮」すなわち「割礼」によって、結果的には神はモーセを殺すことを止められました。ここで「（主はモーセを）放された」と訳されているのが聖書で最初のラーファーです。このように、神がお選びになった者が、なぜかその神によって殺されそうになるが、「割礼」によってそれから免れることがラーファー本来の意味であると考えられます。そしてこの「割礼」とは神とアブラハムとその子孫との間に交わされた契約を指し示す行為です。その契約とは以下のものです。

【新改訳 2017】

創世記

17:7 わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に、またあなたの後の子孫との間に、代々にわたる永遠の契約として立てる。わたしは、あなたの神、あなたの後の子孫の神となる。

17:8 わたしは、あなたの寄留の地、カナン¹の全土を、あなたとあなたの後の子孫に永遠の所有として与える。わたしは彼らの神となる。

17:9 また神はアブラハムに仰せられた。「あなたは、わたしの契約を守らなければならない。あなたも、あなたの後の子孫も、代々にわたって。

17:10 次のことが、わたしとあなたがたとの間で、またあなたの後の子孫との間で、あなたがたが守るべきわたしの契約である。あなたがたの中の男子はみな、割礼を受けなさい。

17:11 あなたがたは自分の包皮の肉を切り捨てなさい。それが、わたしとあなたがたとの間の契約のしるしとなる。

この契約のために、死を、滅びを免れた者たち。それはもちろんアブラハムの子孫であるイスラエルの民です。彼らは神を捨て、偶像礼拝を行った罪によって殺される、滅ぼされるべき者たちでした。しかしこの「代々にわたる永遠の契約」によってラーファーフすなわち死と滅びから「放される」民、「わたしは、あなたの寄留の地、カナンを、あなたとあなたの後の子孫に永遠の所有として与える。わたしは彼らの神となる。」という事実を受け取る民とされることがこのシモンの姑の「熱がひいた」という出来事の中に表されていると考えられます。

7. もてなした

そしてイエシュアによって「熱がひいた」熱病から解放されたシモンの姑は「(人々を) もてなした」とあります。ここに「仕える」という意味の動詞シャーラト(שָׂרַף)が使われています。このシャーラトは本来、アブラハムの子イサクの子ヤコブの12人の息子たちの中で、彼が最も愛したヨセフの上に起こった出来事を指し示しています。

【新改訳 2017】

創世記

39:2 【主】がヨセフとともにおられたので、彼は成功する者となり、そのエジプト人の主人の家に住んだ。

39:3 彼の主人は、【主】が彼とともにおられ、【主】が彼のすることすべてを彼に成功させてくださるのを見た。

39:4 それでヨセフは主人の好意を得て、彼のそば近くで仕えることになった。主人は彼にその家を管理させ、自分の全財産を彼に委ねた。

39:5 主人が彼にその家と全財産を管理させたときから、【主】はヨセフのゆえに、このエジプト人の家を祝福された。それで、【主】の祝福が、家や野にある全財産の上にあった。

ヨセフは奴隷としてエジプト人の主人の「(近くで) 仕えることになった」と記されており、ここに聖書で最初のシャーラトがあります。主人はヨセフに「その家を管理させ、自分の全財産を彼に委ねた。」とあり、そして「主人が彼にその家と全財産を管理させたときから、【主】はヨセフのゆえに、このエジプト人の家を祝福された。それで、【主】の祝福が、家や野にある全財産の上にあった。」と記されています。このようにシャーラトとは本来、その家とその中にあるすべてを管理、支配し、そのゆえに神がその家のすべてのものを祝福されることを意味していると考えられます。これはまさにヨセフの父ヤコブの父イサクの父アブラハムに神が与えられた契約と同じ内容です。

【新改訳 2017】

創世記

12:1 【主】はアブラムに言われた。「あなたは、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へ行きなさい。

12:2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする。あなたは祝福となりなさい。

12:3 わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう。地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」

ヨセフもまたこのアブラハムのように「父の家を離れて」神が示す地へ行った人物と言えます。その結果彼と彼の家、彼の国は大いに祝福されました。このヨセフはアブラハム、イサク、ヤコブすなわちイスラエルの子孫に与えられた神の御計画の「型」であり、神がどのように全地、国々を治め、また祝福されるのかということを示したものだと考えられます。それがシャーラト本来の指し示す意味でありシモンの姑が「人々をもてなした」という出来事の中に表されていると考えられます。

8. 来てください

イエシュアがシモンとアンデレの家に入られてなされたことをまとめると以下のようになります。

御言葉	ヘブル語	最初の言及	神の御計画
そばに近寄り	ナーガシュ(נָגַשׁ)	創 18:23	イエシュアはイスラエルの民とともに国々を治める
手を取って	アーハズ(אָחַז)	創 22:13	王なるイエシュアの国民として選ばれた、捕えられたイスラエルの民
起こされた	クーム(קוּם)	創 4:8	イエシュアを殺すことでイスラエルの罪が贖われる
(熱が)ひいた (解放した)	ラーファー(רָפָא)	出 4:26	契約によりイスラエルは滅びを免れ、救われる
もてなした (仕えさせた)	シャーラト(שָׂרַת)	創 39:4	イスラエルによって全地は治められ、国々は祝福される

これらの意味を指し示す出来事、すなわち熱病であったシモンの姑がイエシュアによって癒され、仕える者となったという一連の内容はすべてイエシュアと弟子たちが「シモンとアンデレの家」に入ったことで起こりました。冒頭で述べたようにこの家はイスラエルの民の家、国を表しています。つまり上記の神の御計画はすべてイエシュアがイスラエル民の国に来られ、イスラエルの民に対してなされる、成就されるものであるということが示されていると考えられます。ですから私たち教会は「主よ、来てください」、また「御国が来ますように」と、日々イエシュアの来臨を待ち望む者とされていますが、それはイエシュアが私たちの心に来るとか、また私たちの家庭や地域、国に来るということではなく、イエシュアがイスラエルの王としてイスラエルの民の家、イスラエルの国に来られるということであり、神がアブラハムとその子孫と交わされた契約を果たされるということなのです。そしてそうでなければ神の御計画は、「神の国」は完成しないのだということを知ることがあります。では私たち異邦人の教会はこれに関わりがないのかという決してそうではありません。イエシュアがシモンとアンデレの家に入られた時、「ヤコブとヨハネも一緒にあった。」と記されているところに、私たちの存在が表されていると考えられます。「シモンとアンデレの家」に指し示されたイスラエルの家に、私たちも一緒に入ります。それが「神の国」の御計画の完成なのです。ですから祈りましょう。「イスラエルの王なるイエシュアよ。イスラエルの家に『来てください。』と。